大分市歴史資料館年報

（平成18年度）

2007

はじめに

大分市歴史資料館では、市民の皆さんに親しまれる資料館であるために、利用者の皆さまの声を反映させながら、よりよい資料館活動をめざしてさまざまな事業を実施しているところです。

まず、展示事業としては、年４回のテーマ展示と年１回の特別展があります。テーマ展示では、第１回「物語をみる」・第２回「お金の歴史」・第３回「絵図を読む－描かれた大分」・第４回「西寒多神社－所蔵文書を中心に」を開催しました。

今回の第25回特別展は、子ども達に楽しんでもらおうと企画した展覧会で、日本人と象の関わりをテーマにした「ゾウがいた！象が来た？」を開催しました。期間中は賀来幼稚園児が描いたゾウさんの絵も展示し、また展示品やゾウについてのクイズを用意して多くの子ども達にチャレンジしてもらいました。とくに、11月３日の文化の日には豊後国分寺跡史跡公園を会場に「ふれあい動物園」を実施し、館内では折り紙でゾウを作るコーナー等も設け、500人を超える親子の参加がありました。たいへん楽しい一日でした。

教育普及事業では、ふるさとの歴史再発見として一般市民を対象に歴史（９回)、考古（９回)、民俗・文化史（６回)、古文書（９回）の４コースの講座を開講しました。小・中学生を対象にした子ども歴史教室では、縄文土偶作りと土器の拓本体験、遺跡発掘体験、縄文かご編み体験、縄文土器作りと野焼き体験を実施し、262人の子ども達が利用しました。

ふれあい歴史体験講座では、管玉・丸玉・勾玉・埴輪作り・土笛作り・火起こし体験などに合計2,159人の参加がありました。

移動歴史教室も昨年より多くの学校へ出かけ、子ども達に体験学習をしてもらいました。17年度より19校増え38校の利用がありました。

夏休み期間中は、小・中学校の総合学習担当の先生方を対象にした資料館体験活動指導者講習会や小・中学生向けの夏休みジュニア歴史講座を実施しました。同じく夏休みの資料館しごと体験ではハプニングが起こりました。小学生（５・６年生）の部は実施出来ましたが、中・高校生の部は台風のため中止になり、大変残念でした。

これら様々な事業をとおし、“大分の歴史遺産を生かし、市民とともに創る歴史資料館”を目標に掲げて、市民が身近に感じる資料館として一層の充実をはかっていきたいと思います。
今後とも、広く各方面の皆様にご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。

平成19年７月１日

大分市歴史資料館
館長　讃岐　和夫

目　　次

展　　示 …… 1
　テーマ展示　特別展示
展覧会余論 …… 6
資料調査 ……12
資料収集 ……13
教育普及活動 ……14
平成18年度　大分市歴史資料館研修報告 ……19
　明治小学校教諭　泥谷　恵美子
図　　書 ……22
資料館利用状況 ……28
管理及び運営 ……30
　歴史資料館協議会　組織機構・事務分掌・職員・歳入歳出
　施設管理業務の内容
施設の概要 ……32
条例・規則 ……34
利用案内 ……40

展　　示

(1)テーマ展示

第１回　「物語をみる」

会期　４月15日（土）～７月２日（日）

開館日数：68日　入館者数：4,396人

日本人は昔から物語のある場面を絵にし「みて」楽しんでいた。物語絵と呼ばれるこうした絵は、平安時代の11世紀初めに書かれた「源氏物語」に竹取物語絵巻などを見せ合う場面があり、10世紀から描き始められていたと考えられている。物語の本文を読む以上に物語がかもしだすイメージを増幅させてくれる物語絵。本テーマ展示では、当館が所蔵する、こうした物語を題材とした美術作品を紹介した。

主な展示品　大織冠図屏風／源氏物語図／東海道中栗毛弥次馬

第２回　「お金の歴史」

会期　７月15日（土）～10月15日（日）

開館日数：80日　入館者数：5,082人

奈良時代の和銅元年（708）に日本で鋳造された通貨「和同開珎」をはじめ、平安・鎌倉・室町・戦国時代に広くわが国において通貨として利用された中国銭などの輸入銭や江戸時代の小判・丁銀・藩札、また明治・大正・昭和時代に発行された鋳造貨幣や紙幣などを展示。さらに世界最初の貨幣とされる古代中国の貝貨や、現在の世界各国の貨幣なども展示し、身近なお金の歴史をわかりやすく紹介した。

主な展示品　貝貨／布幣／刀幣／和同開珎／乾元大宝／天保小判／文政小判／丁銀／寛永通宝／豆板銀／府内藩銀札ほか

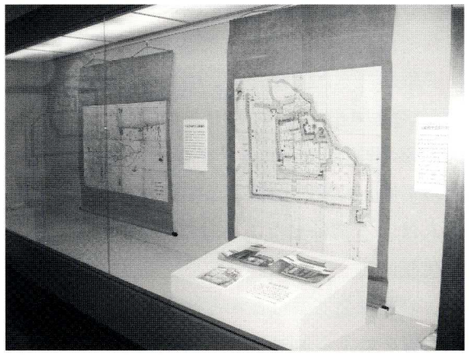
第３回　「絵図をよむ－描かれた大分」

会期　12月２日（土）～１月28日（日）

開館日数：43日　入館者数：1,093人

絵図は、写真や映像が普及する以前、物事の情報を視覚的に伝える有効な手段として利用され、様々な目的で描かれていった。それらの絵図は、時として文書などでは理解しにくい昔の風景や人びとの生活、歴史などを現代の私たちに伝えてくれる。本テーマ展示では、絵巻や城絵図・村絵図・社寺図などの絵図を通して、在りし昔の大分の様子や歴史を紹介した。

主な展示品　府内古図／正保の城絵図「豊後府内城之絵図」（複製）／御城下絵図／嘉永井路絵図（下宗方区有）／柞原八幡宮境内絵図ほか



第４回　「西寒多神社－所蔵文書を中心に」

会期　２月３日（土）～４月１日（日）

開館日数：49日　入館者数：3,539人

大分市の寒田川沿いに鎮座する西寒多神社は、平安時代前期に編纂された延喜式神名帳に豊後国で唯一「大社」として載せられた由緒ある神社である。また、明治４年（1871）国幣中社に列せられ、制度が廃止される昭和21年（1946）まで宇佐神宮に次ぐ県内第２位の地位にあった。こうした歴史をもつ西寒多神社には、明治時代以降神官らが書きとめた膨大な日誌をはじめ、神社の縁起や絵図、また大友家ゆかりの古文書や遺品などが貴重な資料が数多く伝えられている。本テーマ展示では、これらの史・資料を通して、同社の歴史を紹介した。

主な展示品　豊後国一宮西寒多神社之略記／太政官列格通達書／西寒多神社形容姿勢図／徳川家康御内書（大友松野家文書）／音無の響（大友松野家伝来）ほか

展覧会余論

豊後に象がやって来た?!

歴史資料館　長　田　弘　通

【はじめに】

今回の特別展のタイトルは「ゾウがいた！象が来た？」。展覧会のタイトルとしては、あまり見かけない表現である。なぜ、象の表記をカタカナと漢字で使い分けるのか。どうして断定形の「！」と疑問形の「？」がついているのか。疑問に思われる方も多かったのではないか。

解答めいたことを書けば、次のようになる。まず、表記の使い分けであるが、大むかし、日本列島各地には象が生息していた。しかし、これらの象は絶滅しており、化石でしかその存在が知りえない。展覧会で紹介した大分にいたステゴドンゾウのように絶滅した象をさす場合にカタカナで表記し、現存するアフリカ象やアジア象（インド象）を意味する場合に漢字で表記した。

つぎに、「いた」が断定形で、「来た」が疑問形の意味であるが、中央史レベルの歴史事象を知っている方は、それこそ疑問に思われたであろう。大むかしに日本列島にゾウがいたことは有名であるから、「いた！」と断定形なのはわかる。一方、江戸時代の海外交流史や文化史に興味がある人にとって、長崎にアジア象が２度やって来たこと、その内、1728年に来た象（和暦をとって享保の象と呼ばれる）は長崎から京都、江戸へ旅して、天皇や将軍徳川吉宗が見物したことは周知の事実であるから、なぜ「来た？」と疑問形なのかと。日本という大きな視点で見た時、近代以前に象が来たことは紛れもない事実であるから、疑問形とする余地はない。それにも関わらず、「来た？」としたのは、大分に象が来たのかという問いかけを表現したかったのである。

戦国時代、大分に象が来たという逸話は、その根拠となる文献が江戸時代に編さんされた歴史書であり、これまで史実として大きく取り上げられてこなかった。そのため、逸話の存在自体が知られていない。この展覧会は大分に大むかしゾウが住んでいた、そして、戦国時代に象が来たとの逸話があることが企画の出発点であった。それをキャッチコピー的に短く表現し、展覧会に興味を持ってもらうため、「ゾウがいた！象が来た？」との一風変わったタイトルを付けた次第である。

さて、戦国時代、本当に豊後に象がやって来たのか。この問題について、展覧会の展示解説及び図録では、その性格及び紙数の関係から、史料を引用しながら詳しく述べることができなかった。そこで、本稿において、今一度関係史料を紹介しながら、その真偽に迫ってみたい。

【１．象豊後渡来説－「大友興廃記」】

豊後に象がやって来たことを記す地元の唯一の文献は「大友興廃記」(1)である（以下「興廃記」と略記する）。この書物は寛永12年（1635）、佐伯氏の家臣であった杉谷宗重が著した豊後大友氏400年の歴史書である。全22巻からなるが、内19巻が大友宗麟時代の記述にあてられている。帆足萬里（1778－1852）の「井楼纂聞引用書目」によれば、杉谷宗重は大友氏の豊後除国後、伊勢に移住し、80歳を超えた父と同年輩の古老の二人から聞き書きして、本書をまとめたとされる。

著者杉谷宗重の生年が不明のため、何歳まで豊後で生活し、歴史的事象を実体験していたかはわからない。「興廃記」が完成したとされる寛永12年に父が80歳を超えていたことから逆算すると、大友宗麟が亡くなった天正15年（1587）に父は33、4歳。宗重が第一子だとして、その生年は早くても父が20歳前後の天正元年（1572）前後と推定するのが妥当であろう。と、すれば、「興廃記」に記された内容の多くは、宗重誕生以前の出来事、自身には記憶がない、父と古老からの聞き取り、伝聞によっていることになる。

上述したように、「興廃記」は古老の聞き取り、伝聞によってまとめられた文献であり、その記述内容をそのまま歴史的事実として、受け取ることはできない。一方、大友氏が支配者として発給したり、作成したりした書状や帳簿、また、家臣どうしてやり取りされた書状など、いわゆる一次史料には書き記されていない逸話が多く取り上げられており、当時の歴史事象を説明しようとする時、非常に魅力的な素材を提供してくれる文献でもある。一口に言えば、「興廃記」とは、大友氏の歴史について魅力的な素材を提供してくれるが、その真偽は定かでない文献となる。そのため、「興廃記」を歴史研究に利用する場合、その内容がどれだけ同時代の一次史料により裏付けられるか、慎重に検討しなければならない。

先述したように、この「興廃記」に豊後、具体的には臼杵に象が渡来したとの記述がある。それは巻十三「治国数之事并唐船渡海之事」と題された項で、関係する部分を抜き出すと以下のとおりである。

[前略]
去天文十年辛丑七月廿七日、唐船豊後神宮寺に着津す、大明人二百八十人来る、唐の御門世宗粛帝の御宇なり、同十二年癸卯八月七ケ日五艘来る、同十五年丙午に佐伯の浦に着、永禄年中唐船幾度々来る、天正三年乙亥の夏、臼杵の浦に着、此時一入種々の珍宝に、生る猛虎四つをそへられ、又大象一つを加へ、其外孔雀・鸚鵡・麝香などをそへられたり、それのみにかぎらず、或は絵讃、或は書巻の名筆、ならびに錦繡・綾羅、又は伽羅の榾、猩々の皮二十間つづいたるなど渡る、日本の寄物とも到来す、名誉の至なり、
[後略]

これによれば、天文10年（1541）７月中国船が「豊後神宮寺」（現在の大分市春日浦と考えられている）に着き、280人もの中国人が渡来した。それ以降、中国船は天文12年に５艘、同15年には佐伯に入港し、さらに永禄年間（1558～70）にもたびたび豊後へやって来たという。

中国船が豊後各地へ入港するようになった最初が天文10年であった確証はないが、天文14年（1545）頃府内近くの港（沖の浜）に中国船が６、７名のポルトガル人を乗せて入港したとの記録がある(2)。また、元亀２年（1571）には二人の中国人が府内今小路あった「惣道場」（浄土真宗寺院）に梵鐘を寄進している(3)。さらに、府内には唐人町があった。これは文字どおり中国人が住む町であったと考えられ、それを裏付けるように、唐人町の住人に「ゑんはい」・「けんさん」・「ふくまん」など中国人と考えられる名前を確認できる(4)。府内など豊後各地に中国船が入港し、中には定住する中国人がいたのである。「興廃記」が語る中国船の来航自体は歴史的事実である。

そのような中、天正３年（1575）の夏、中国船が臼杵に入港し、いろいろな珍物をもたらした。それらは虎４頭に、大象１頭、それに孔雀・オウム・麝香（ジャコウネコ ｶ）などの珍獣に書画や綾錦などの織物であったという。

これが大友氏側の文献で豊後・臼杵に象がやって来たことを記した唯一の部分である。先述したように「興廃記」は伝聞に基づく記録であるため、記述内容をそのまま歴史的事実とすることはできない。

では、天正３年豊後臼杵への象渡来説は、同時代の信頼できる史料によって裏付けられるのであろうか。

【２．虎は来た－「島津家久上京日記」】

実は、天正３年（1575）に豊後臼杵に象が来たとの「大友興廃記」の記述を明確に裏付ける同時代の史料はない。しかし、史料がないからといって、豊後への象渡来説の真偽に迫る作業をやめるわけにはいかない。直接的に証明できないにしろ、傍証してくれる史料はないかと探

していくと、「興廃記」が象とともに臼杵に渡来したとする虎に関する史料が存在する。それが「島津家久上京日記」(5)(以下「上京日記」と略記する）である。

まず、この「島津家久上京日記」がどのような史料なのかを説明しよう。島津家久は薩摩・大隅両国の戦国大名であった島津氏一族で、天正年間当主であった島津義久の弟である。天正6年（1578）島津氏が日向全土をほぼ征服すると、翌7年家久は日向支配の総責任者として、佐土原（宮崎市）に封じられた。

「上京日記」とはこの家久が天正3年2月7日から7月20日までの約半年間京都へ旅行した際に記した日記なのである。

2月7日、兄で島津家当主義久に出発を報告した家久は串木野で旅行の準備に取り掛かり、20日京都へ向け出発、4月20日京都へ着いた。京都では連歌師里村紹巴の元に日参し、連歌の指導を受けながら、清水寺などの社寺や賀茂祭を見物、6月1日には伊勢神宮に参詣し、京都への帰路には東大寺や宇治の平等院に立ち寄っている。そして、6月8日薩摩へ向け、帰国の途についた。往路は瀬戸内海を通ったが、復路は日本海航路を取り、7月12日平戸まで戻って来た。

さて、問題はこの平戸での家久の行動である。到着翌日の記事は以下のようになっている。

一十三日、唐船に乗見物仕候、なんはん（南蛮）より豊後殿へ進物とて虎の子四匹、それをめつらしく見帰候へハ、加治木衆彦太郎といへる者樽・食籠持来候、亦肥州より樽二ツ肴取合、平松七郎左衛門といへる者使者、

前日に平戸に着いた島津家久は7月13日、ちょうど港に停泊していた唐船＝中国船に乗り込み、中を見物した。すると、南蛮から「豊後殿」へ贈られるという虎の子四匹が乗せられており、それをたいへん珍しく見物して、宿へ帰ったのである。

「豊後殿」とは豊後の戦国大名大友氏、具体的には宗麟、もしくはその長男の義統をさしており、家久が乗り込んだ中国船には大友氏へ贈られる予定の虎の子4匹が積み込まれていたのである。

「大友興廃記」が象と共に虎4匹が臼杵にもたらされたとするのが天正3年の夏。島津家久が平戸で大友氏に贈られる虎の子4匹を見たのは天正3年7月である。旧暦の7月は季節的には秋であり、「大友興廃記」の記す夏とは齟齬がある。しかし、虎を乗せていたのが中国船、その数も4匹と両者は一致する。家久が平戸で見物した虎の子4匹を乗せた中国船は、その後臼杵に回航し、それを大友氏へ献上したと考えて間違いない。「大友興廃記」が記す臼杵への虎渡来は「上京日記」という同時代の1次史料により歴史的事実として証明されるのである。

では、象の渡来はどうなのか。「上京日記」により「大友興廃記」記述内容の一部である虎の渡来はほぼ証明される。虎の渡来が事実ならば、同時に象も来たであろうと推定する事も可能であろう。しかし、それは短絡的な考え方である。島津家久が見たのは、あくまで虎のみなのである。

野生の虎がいない日本で、その子どもを実見したことも十分珍しかったであろう。しかし、虎とともに臼杵に来たという象は仏涅槃図や普賢菩薩に関わる仏教美術でしか知らない、虎以上に珍しい動物であったはずである。その象が、虎と同じ中国船、もしくは同時に入港していた別の中国船に乗せられていたとすれば、島津家久は見物し、それを日記に記したのではなかろうか。しかし、見物したと記したのは虎の子のみであり、家久は象を見ていないとしか考えられない。

では、なぜ見ていないのか。その理由には二つの場合が推定される。一つは、そもそも天正3年、象が豊後・臼杵にもたらされていない場合である。豊後へもたらされていないのであれば、島津家久が平戸で象を見ていないのは当然

である。もう一つは、象は豊後へ来るべく準備されていた。しかし、家久が平戸に着いた時、象を乗せた中国船がまだ平戸に入港していなかったか、逆にすでに豊後へ向け出港していたため、家久は見ることができなかった、という場合である。この場合であれば、島津家久が平戸で象を見たと記してないからと言って、象の豊後渡来自体を否定することはできない。

「大友興廃記」は天正3年の夏、象や虎、その他の珍獣たちが豊後・臼杵に渡来したとする。そして、「島津家久上京日記」により、虎の渡来は証明できるものの、象の渡来は肯定も否定もできない。豊後・臼杵への象渡来の真偽を追求するには、「上京日記」だけでは不可能で、別の傍証史料を探さなくてはならなくなった。

【 秀吉に贈られた象
―「日本国王記」と「鹿苑日録」

豊後に象が来たとされる天正3年（1575）から数えて22年後の慶長2年（1597）、間違いなく象が日本にやって来た。これは、当時フィリピン・マニラを拠点に東アジア貿易を展開していたスペインが日本との友好・通商関係を求めて、豊臣秀吉に使節を派遣し、秀吉への献上品としてもたらしたものである。

この秀吉へ献上された象について詳細を記しているのが、アビラ・ヒロンが著した「日本国王記」(6)である。アビラ・ヒロンはスペイン人商人で、文禄3年（1594）に初来日し、元和5年（1619）までの25年間、日本とフィリピン間の貿易に従事し、その間長崎に屋敷を構えていた。「日本国王記」はそのヒロンが実際に見聞した事実や、伝聞にもとづき、日本とポルトガルやスペインなどとの通交関係をまとめた文献である。

この「日本国王記」によれば、秀吉に献上された象はドン・ペトロといい、秀吉の前に引き出されると、地面に3度ひざまずき、鼻を高く上げて大きくほえ、秀吉に挨拶したという。そして、秀吉が座敷の端まで出て行って象に近づき、果物を与えると上手に鼻先でつかんで高く持ち上げ、それから口に入れ食べた。その様子を秀吉はたいへん喜んで見ていたと記されている。

さて、豊後への象渡来との関連で問題となるのは、このドン・ペトロと名付けられた象が秀吉の屋敷に向かう途中の様子を記した次の個所である。

何はさておきマニラの使節一向は日本で見たことのない象を通りに引き出した。カンボジャの王が何年も前に豊後の殿ドン・フランシスコに象を一頭送ったことがあるにはあったが、間もなく死んでしまったので、その地方の幾つかの村や町の者しか象を見ていないからである。そんなわけで大勢の人々が象を見ようと駆けつけ来たので、いくら棒で打ち叩いても群衆を立ち退かせることはできなかったばかりか、遂には国王の家来たちが多数、百人の獄卒を連れてやって来て道を開けさせなければならなかったし、幾人かの死者を出したほどであった。

それまで見たことのない象を一目見ようと、群衆が通りに押しかけ、秀吉の家来が整理に出動しなければならないほどであった。注目すべきは、日本の人々が象を見たことがないことを説明するため、何年も前にカンボジアの王が豊後のドン・フランシスコ、すなわち大友宗麟に象を一頭送ったが、すぐに死んでしまったので、この象を見た者は限られていると紹介している点である。

以前カンボジアから大友宗麟に贈られ、日本に象が来たことはある。しかし、その象を見た人は少なく、ほとんどの日本人は今回秀吉に献上されるため持たらされたことで、象をはじめて見ることになったというのである。

ヒロンは「日本国王記」を書いた時点で、「慶長2年以前に豊後に象が来た」ことを知っていたことになる。ヒロンの初来日は文禄3年（1594）、「大友興廃記」が豊後へ象が来たとするのは天正3年（1575）であるので、ヒロンが

同時代の情報として豊後への象渡来を知ったはずはない。早くても慶長2年、遅くて「日本国王記」の当該部分をまとめていた段階で、秀吉献上象以前に「豊後の大友宗麟に送られたことがある」ことを知ったと考えられる。しかし、ヒロンがある時点で豊後への象渡来説を知ったからといって、それが事実であったとは断言できない。「豊後に象が来たことがある」という伝聞が流布していたことが確認できるに過ぎない。

ヒロンが「豊後に象が来たことがある」との伝聞をいつ知ったかはっきりしない。では、この伝聞はいつ頃から中央で流布していたのであろうか。

慶長2年、豊臣秀吉に献上された象を見た日本人の記録が残されている。それは京都、相国寺鹿苑院の院主が代々書き留めた日記「鹿苑日録」(7)である。豊臣秀吉に象が献上されたのは慶長2年7月24日。「鹿苑日録」の当該日条には、以下のように記されている。

> 廿四日、呂宋国より使僧あり、黒象一隻并に銀盤・銀椀等十六種進献す、象日本に到るは、三十五・六年己前、豊後太守大■に贈らる由これを聞く、これを見ず、今度初めてこれを見る
>
> （原漢文を読み下した）

鹿苑院主は秀吉に献上された象を実見し、日記に「日本に象が来たのは35､6年前、豊後国主大友氏に贈られたと聞くが、私はこれを見ていない。今回初めて象を見た」と記したのである。

「大友興廃記」が豊後大友氏に象が贈られたとするのは天正3年（1575）で、慶長2年（1597）から数えると22年前であり、鹿苑院主がいう35,6年前とは齟齬があるものの、慶長2年以前に「豊後大友氏に象が贈られたことがある」という伝聞が存在していたことが確認できる。この伝聞情報の発信源がどこであったかわかならい。慶長2年の秀吉献上の象により初めて象を見た日本人が、「では、これ以前に日本に象が来たことがあるのか」と疑問に思うのは不思議でない。その疑問に対し、長年中国・東南アジア貿易、すなわち南蛮貿易に携わっていた日本人商人が「そういえば、豊後の大友氏に贈られたと聞いたことがある」と紹介したのか、逆にスペイン側が「豊後の大友氏に贈られたことがあるようです」と答えたのか、いずれかではないだろうか。

「日本国王記」も「鹿苑日録」も豊後へ象が来たことを直接的には証明してくれない。しかし、南蛮貿易に携わっていた日本人や外国人の中では「豊後の大友氏に象が贈られたことがある」ことが記憶として伝承されていたことはうかがえる。アビラ・ヒロンという外国人商人と鹿苑院主という日本人僧侶、立場の異なる二人が、豊臣秀吉への象献上という事件に際し、共に豊後への象渡来説を記していることは、「以前豊後の大友氏に象が贈られたことがある」との伝聞はかなり信憑性の高い情報として信じられていたといえるであろう。

【おわりに】

ここまで、「大友興廃記」が記す天正3年（1575）豊後・臼杵への象渡来説の真偽を追求してきた。まず、これを直接的に証明する同時代の信頼性の高い史料は存在しない。そこで、傍証となる史料を探してみると、「島津家久上京日記」により、象と同時に来たされる虎の豊後渡来がほぼ証明される。

そして、やや時代は下るが、慶長2年（1597）豊臣秀吉に象が献上された時の2点の記録に、「これ以前に豊後大友氏に象が贈られたことがある」との伝聞が紹介されており、それはある程度信憑性の高い情報として信じられていたと推測できた。

以上のことから、本稿の目的である豊後への象渡来説の真偽に対する答えを出せば、次のようにいえよう。

「大友興廃記」に見える天正3年に豊後臼杵に象が渡来したとの記事は、100%歴史事実とは断定できない。しかし、象とともにもたらされたという虎はほぼ間違いなく豊後へ渡来していること。そして、22年後、豊臣秀吉に象が献上された時、「以前豊後の大友氏へ象が贈られたことがある」との伝聞・記憶が伝えられていたことからすれば、豊後への象渡来はほぼ事実と考えてよいのでないだろうか。

豊後への象渡来の時期は、「日本国王記」が慶長2年の「何年も前」、「鹿苑日録」が「35,6年前」とするものの、「上京日記」で虎の渡来が天正3年で間違いないことからすれば、象も虎と同じく天正3年に豊後へやって来たと考えるほうがよいであろう。

今、戦国時代、豊後へ象が来たのかとか問われれば、約90%の確率で事実であろうと答える。では、残りの10%は何かといえば、「島津家久上京日記」に象を見たと書かれていないことによる。「上京日記」に象のことが書かれていれば、なにも饒舌な本稿を書く必要はなかった。「興廃記」の内容は「上京日記」で証明できるといえば済む。「上京日記」に一言も象が登場しないため、言い換えれば、島津家久が虎を見ながらも、象を見ていないために長々と駄文を書いてきた。豊後に象が来ながらも、島津家久が平戸でそれを見なかった、見ることができなかった可能性は先に述べた。状況としては起こりうるものであるが、果たしてそれで正しいかと問い詰められれば、確信はもてない。それが、豊後への象渡来説の真実性を90%とせざるを得ない点である。

最後に、本稿のタイトルは「豊後に象がやって来た?!」である。この「?!」は象が来た確率が100%ではなく、90%に留まらざるを得ないことを意味している。

※註

(1)『大分縣郷土史料集成』系図篇・戦記篇(一)
(2)1578年10月16日付「フロイス書簡」
　『十六・七世紀　イエズス会日本報告集』
　第Ⅲ期第5巻
(3)岡山県余慶寺梵鐘銘
(4)「天正十六年伊勢参宮帳」『大分縣史料』(25)
(5)『鹿児島県史料』　旧記雑録後編一
(6)『大航海時代叢書』ＸＩ
(7)辻善之助編『鹿苑日録』

資　料　収　集

資料収集委員会

1．会議

開催日　平成19年3月19日（月）

場　所　大分市歴史資料館　会議室

議　題　(1)委嘱状の交付

(2)会長、副会長の選出

(3)購入予定資料の説明

(4)購入予定資料の熟覧

(5)購入予定資料の審議

2．委員名簿

氏　名	役　　職	分　　野
菊竹淳一	九州産業大学芸術学部教授 九州大学名誉教授	日本美術史
豊田寛三	大分大学教育福祉科学部教授	日本史
段上達雄	別府大学文学部教授	日本民俗学
鳥井裕美子	大分大学教育福祉科学部教授	日欧交渉史 比較文化論
下村　智	別府大学文学部教授	日本考古学

購　入　資　料

(1)豊臣秀吉朱印状　　1幅

本紙：縦41×横52.1cm

本書状は、太閤豊臣秀吉が「羽柴豊後侍従」こと、大友吉統（義統）に対して、急ぎ朝鮮への渡海のために用意できるだけの船を肥前名護屋へ遣わすように命じたもので、「名護屋へ被成御着陣候」と秀吉の名護屋着陣を伝える内容が記されていることから天正20年（1592）4月28日に出された内容とみられる。

管見のかぎり、同様の書状が同じ日付で島津氏、毛利氏、鍋島氏などにも出されており、そのいずれにも自前の船のほか「商人船」まで調達するように指示されており、この出兵で如何に多くの船が必要とされたかが分かる。

『大友家文書録』によると「朝鮮陣豊後兵船八十二艘」とあり、本書状の命をうけて大友氏が調えた兵船は82艘に及んだようで、当時黒田氏が調えた軍船27艘、島津氏47艘と比べるとその数量は約3倍ないしは2倍にあたる。

細川氏、南条氏にあてた秀吉朱印状（2月9日付）によると、多くの船を用意するほど「手柄」とされており、大友氏はこの意味において黒田氏や島津氏以上の働きをしたものといえる。

本書状は、こうした第一次朝鮮出兵における秀吉と大友吉統の関係や、大友氏が出兵に果たした役割の一端がうかがえる貴重な内容である。

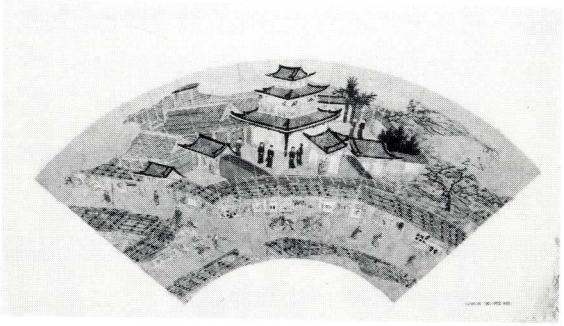
なお本史料は、柳川の大友文書や東京大学史料編纂所の大友松野文書の影写本の中にも収められていない新出の古文書であり、日付の下には秀吉の権威を象徴する有名な「糸印」の朱印が捺されている。

豊臣秀吉朱印状（本紙）

(2)複製品製作

「都の南蛮寺図」　　一面

今回、同図原本を所蔵している神戸市立博物館の承諾を得て、複製品（写真印刷に金箔・手彩を加える）の製作を行なった。



「都の南蛮寺図」（複製品）

平成18年度　大分市歴史資料館研修報告書

研修生　大分市立明治小学校
教諭　　泥谷恵美子

1．研究主題

子どもにとって身近な地域の文化財を素材にした教材の作成と体験活動の指導方法

2．研究のねらい

教職について７年目を迎えたが、日常の業務において年々慌ただしさを感じていた。子どもたちの活動は、一つの行事を終えるとまた次の行事に備えてと、常に目的達成に向かっているが、毎日の授業と平行して考えると、やはり子どもにとっても慌ただしい毎日であろう。そんな中、子どもが「しょうがなく」ではなく「見たい」「やりたい」「聞きたい」と自らやる気を持って取り組める学習は、自分たちの生まれ育っている身近な地域に密着したものだろうし、経験として深く記憶に残る体験活動だろうと思った。実際に大分市歴史資料館に訪れる子どもたちは、生き生きした顔でやってくる。６学年の担当だったときに歴史資料館の「勾玉づくり・館内見学・火おこし」の引率をしたが、いつも以上に熱心に取り組んでいる子どもたちの姿に驚かされた。展示室の見学では、自分たちの生活の場に近い横尾遺跡の出土品を見て、驚きの声をあげながら非常に興味深げに見ていた。また、これまでの経験により、教師自身の実体験から感動的に話ができる授業では、子どもたちの課題の引き受けも円滑であり、その度に教師自身の感動体験の大切さを痛感してきた。

そこで本研修では、子どもにとって親しみ深い身近な地域の文化財を素材にしたもので、手軽に使える教材を開発したいと考えた。現場の教師によってこのような教材を開発することは時間的に難しいものである。子どもたちを外に連れ出し、歴史を身近に感じてもらおうと思っても、その下調べや準備には大変な労力と時間がかかってしまう。それで、現場の教師たちのためにも子どもたちのためにも、すぐに役立ちもっと調べてみたいという興味をそそるような教材を作成したいと思った。その教材では、大分に残る文化財や遺跡を中心に紹介し、子どもの目線で面白さや驚きを意識しながら作成を進めたいと考えた。

小学校学習指導要領社会編においては、「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること。」とある。現在歴史資料館は、展示・蔵書・ＶＴＲなどの資料の活用ができるほか、火おこし・明るさ体験・勾玉づくり・埴輪づくり・土偶づくり・土笛づくり・昔の道具体験・和凧作り・しごと体験などの体験の場としても活用ができる。そこで資料館の日常の業務を手伝わせてもらって、これらの体験活動の指導法を身につけたいと考えた。

さらに、歴史資料館での研修を希望した理由の一つに、専門性を身につけたいという思いがあった。常々自分に得意分野がないことを残念に思っていたので、この機会に郷土史を自らの足で勉強して、学校現場に戻ったときに子どもたちや同僚の教職員に還元できるような知識を身につけ、子どもに伝える感動体験をしたいと考えた。

3．研究内容

(1)　身近な地域の歴史教材の作成
(2)　体験学習の指導方法と資料館の活用
(3)　自分の専門を深めるための研修
(4)　研修のまとめ

屋外での「農機具体験」指導

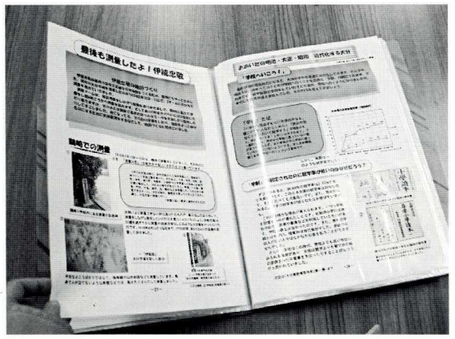
4．研究の成果と今後の課題

①研究の成果

○「身近な地域の歴史教材の作成」について

自分はこれまでに、大分市の文化財や遺跡について網羅的に調べたことはなく、「子どもに身近な素材を」といってもすぐにどのようなものが大分市にあるのか思いつかなかった。そこで、資料や文献により調べた上で地図を片手に現地に見学に行き、そこにそれがある由来や特徴などを調べ、遺跡や遺物のかもし出す雰囲気も感じることができた。そして調べたことをもとに、子どもの目線で面白さを感じると思われる歴史上の出来事や実際に見ることができる文化財などを、授業で紹介する「おおいた子ども歴史資料集」を作成することができた。作成にあたり、実際の授業時間内に使うために、教科書の内容に照らしあわせて内容の精選をした。また、写真やイラストなど視覚的な情報を多くし、文字数は多くなりすぎないように心がけた。

さらに、もっと広く研修の成果を還元できる方法を考えた。勤務校の明治小学校には歴史をテーマにしたクラブはなく、本格的な歴史の勉強は6学年になるまで待たなければならない。そこで、異学年間で楽しく活動できて通常の授業とは違った楽しさを味わえるクラブができれば、歴史学習をさらに充実させることができると考えた。そのため、歴史資料館で行っている体験活動で習得した指導法をもとに、体験活動と明治地区の歴史にふれる年間指導計画と指導内容を作成した。一回の授業時間が45分であることや年間10回程度の授業時数しかないことを考え計画を立て、材料費の計算や学習シートや教具の製作にまで及ぶことができた。



「子ども歴史資料集」

○「体験学習の指導方法と資料館の活用」について

歴史資料館では様々な体験学習を行っているが、それらの活動の指導法を学び実際に指導することができた。まず、これまで歴史資料館の職員が培ってきた用具の準備や子どもの誘導の仕方、説明の内容や指示の出し方などを学んだ。各学校が体験学習に訪れるのにあわせて、学習指導要領や教科書、引率教師のねらいなどを整理しながら、指導マニュアルをつくった。子どもたちの反応をみながら、マニュアルに改善を加え、一つのねらいに数パターンの指導法を考えることができた。また、集団を引率する教師の姿から学ぶことも多く、声かけの仕方やマナーの徹底など、今後の学校現場での指導に大変参考になった。

さらに各学校の体験学習だけでなく、一般市民向けの講座でも指導をさせてもらった。講座は一般市民に歴史資料館を広く活用してもらうため行われている。何度でも来館してほしいという期待から、職員は「満足のいくものを得て帰ってもらう」という思いで市民と接している。自分が指導するにあたって「物をつくるときにお客さんが失敗しないように」など事前に職員と話し合いをし、児童を対象にした授業とは違った、お客を迎える側としての心得を学ぶことができた。

○「自分の専門を深めるための研修」について

小学校では全教科指導するのが当然でどの分野も教材研究は欠かせない。しかし、尊敬する教師の中にはやはり得意分野がある人が多く、そういう教師が校務分掌でもその分野のリーダーとなって子どもの支援に努めている。自分には得意分野がないことを常々残念に思っていたが、歴史資料館で研修することにより学生時代に専攻していた歴史分野の知識を広げることができた。歴史資料館主催の市民を対象とした「ふるさと歴史再発見講座」やテーマ展・特別展から、これまで知らなかった大分の歴史を学ぶことができた。また、発掘作業や整理作業などに参加させてもらい、歴史を紐解いていく感動も味わえた。さらに、自分の生活の中で歴史にふれる時間をとることを心がけ、他の資料館や博物館の見学をしたり、資料館外の講座を受講したりすることもでき、自分の興味関心に基づいて歴史の勉強をすることができた。子どもたちに語りかけるときに、教師の感動体験や実際の経験から出る言葉がいっそう心に響くことは、これまでに実感してきているので、今研修での経験が今後大いに学校現場で役立つと思う。

②今後の課題

研修にあたっては、常に学校教育との関わりを念頭に置き進めていったが、今回の研修で作成した「おおいた子ども歴史資料集」を実際に使って、子どもたちに歴史にふれる楽しさを知らせたい。また、調べた大分の歴史的事象に関する情報等を子どもたちや現場の教師たちに提供することで、子どもが自ら歴史の歩みに興味をもち、学んだことを生活に活かす態度を育成したい。しかし、歴史は、日々新しい発見の繰り返しでどんどんぬりかえられていくものである。よって、今後も資料館の展示やイベント、書物や映像などから得られる情報にアンテナを伸ばしておかなければならない。歴史的事象の新しい解釈や発見にあわせて、作成した資料集の内容の見直しや情報の差し替えなどをしつづけていかなければならない。

また、教育現場で体験活動を取り入れるには、対象の人数、場所などの環境の制約や、支援者の人数などを考えなければならない。さらに、ねらいにそってその都度指導法をかえていく必要がある。今回習得した指導法をもとに、円滑に体験活動が行えるように指導の流れに工夫を加えていかなければならない。必要に応じて、歴史資料館からゲストティーチャーを呼ぶなどして、資料館を訪れるだけにとどまらず、活用をしていきたいと思う。日々の教育活動の中で、今回の研修をどれだけ活かしていけるかが大きな課題である。

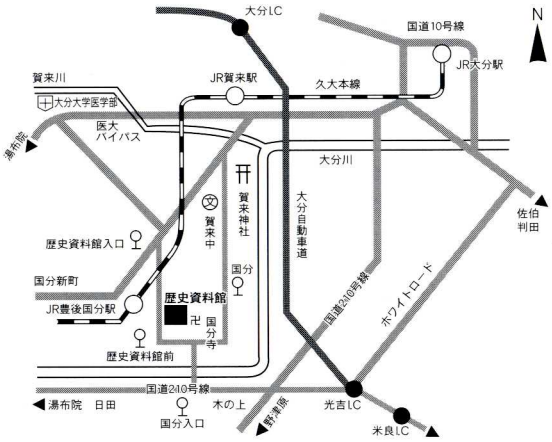
利　用　案　内

開館時間　午前９時～午後５時
（入館は午後４時30分まで）

休 館 日　毎週月曜日（祝日の場合は開館）
ただし、毎月第１月曜日は開館し、
翌火曜日が休館（祝日の場合は開館）
祝日の翌日（土・日曜の場合は開館）
年末年始（12月28日～１月４日）

観 覧 料　大　人200円（団体150円）
高校生100円（団体 50円）
中学生以下無料
＊団体は20名以上
＊特別展開催中は別料金となる場合があります。

交通機関　ＪＲ久大本線
○豊後国分駅下車徒歩２分
大分バス
○歴史資料館入口下車徒歩５分
国分新町ゆき



大分市歴史資料館年報
2007
発 行 日　平成19年７月１日
編集・発行　大分市歴史資料館
〒870-0864 大分市大字国分960番地の１
TEL(097)549-0880 FAX(097)549-5766